木の文化を支える森づくり

私たちのまち高山市は、周囲を北アルプスなどの峰々に囲まれ、日本海と太平洋を分ける分水嶺（ぶんすいれい）を持つ源流域です。そこには、古くから私たちの暮らしを支えてきた広大な森が広がり、多種多様な生き物の営みがあります。豊かな森を次代を担う子どもたちに伝えていくのは、私たちの使命です。今月号では、私たちの身近にある森について考えていきます。

ホゾ穴があけられているクリ材
（堂之上遺跡出土）

連綿と続く木の文化の系譜

美しき森は収穫多き森―日本の森林は、四季の変化に富んだ温暖な気候に恵まれ、樹種も多く多様な姿をみせます。人々はこうした豊かな森林と古くから関わり、さまざまな形で木を使ってきました。

市内には数多くの縄文遺跡が発見されていますが、その中の一つ堂之上（どうのそら）遺跡（久々野町）には、クリ材にホゾ穴があけてある柱材が出土、展示されています。古くは縄文の時代から、人々は木の特性を知り、そして木を生かして暮らす高い文化があったことをうかがい知ることができます。

1万年余りも続いたとされる縄文時代は、ひとつの時代がこれほど長く続いた点では世界史上でもたぐいまれな時代であり、縄文の人々が森の中で自然

ツメタの一位：一之宮町の宮川源流国有林に生育。幹周り約6.9ｍ、推定樹齢は2,000年。林野庁指定「森の巨人たち百選」にもなっています。
市天然記念物